

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

京都大学

前期日程

科目

数学(文系)

総括

難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

第3問を除けば、過去2年に比べると取り組みやすい問題が多かった。論証の問題も第3問のみであった。この問題はほとんどの受験生にとっては捨て問である。実質4問を120分で行うので、1問あたりじっくり時間がかけられる。このような標準的な出題が並び、じっくり時間がかけられるときは、差が付きやすい。数学が得意な受験生は4問完答でき、そうでないものは2問程度しかできない。2025年度のようなはっきり難しい問題が3問ほど並ぶと、実質2問の出来不出来で、ドングリの背比べとなる。数学が不得意な受験生にとっては、差をつけられないので有利に働くが、逆に数学が得意で点数を稼ごうと考えていた受験生には不利である。しかし、本年のような標準的で1問以外はどれでも解けるので、出来不出来の差が大きかったのではない。

第1問は計算が煩雑になるが、腕力で片付けるか、三角関数を導入して少し工夫するか。第2問は問題文の意図が分かれば、基本的にねじれの位置にある2線分の距離を求めることになるので、結果は合わせてもらいたい。第3問は基本的に1次不定方程式 $3x+py=N$ という手垢のついた題材であるが、受験生には難しいであろう。「 p が3より大きい」というのをサイズの条件とと思っている人は、取り付く島もないだろう。現場ではこの問題に深入りしない。第4問は典型的な群数列である。群数列の問題のポイントは与えられた数列が群数列だと気が付くことである。本問は群数列の和の問題で、群の途中までの和とかではないので親切な問題である。最後の和に「等比と等差の積の和」という典型問題も現れ、勉強したことが報われる。第5問は久しぶりの期待値の出題である。期待値と数列の和の融合問題の練習として同じ問題の経験があるのではないかな。少し親切すぎる出題である。連続する整数の積の和も定番の変形で差の形にできるので、計算も楽である。

〈特記事項・トピックス〉

第1問に変数の設定があるのは京大としてはめずらしい。逆にこれがない方が円周上の点であるから三角関数が導入できたであろう。藪に引き込む誘導か。それとも与えている t に引っ張られることなく、自力で三角関数を導入せよとの厳しい要求か。

第2問の図形の道具が与えられていないのは京大らしい。道具の選択から京大は問われるので、問題文にベクトルはないが自分で導入してもらいたい。

第3問に整数の論証問題が出題された。昨年度も整数問題が出題された。新課程になり教科書から「整数」の単元がなくなったが、京大はお構いなしに出題するとの意思表示が感じられる。

〈合格への学習対策〉

例年確率、微分積分、図形は頻出分野である。誘導内のない問題が多いのが京大の特徴であるので、普段の問題集で学習するときは、誘導の意味や有難みを感じることが大切である。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1	記述	II	図形と方程式、面積	円の接線と放物線で囲まれた領域の面積の最小値	標準
2	記述	B	立体図形、ベクトル	正四面体の向かい合う2辺上の2点間の距離	標準
3	記述	A	整数	1次不定方程式の非負解の存在	難
4	記述	B	数列、和	群数列の和	標準
5	記述	I	確率、期待値	1～ n から3数取り出したときの最大数の期待値	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。